

実践報告・英語の授業での映画利用法

——映画「フォレスト・ガンプ」を使った場合——

堀内 ちとせ

<目的>

英語が専門ではなく、それほど得意でもない学生に対して、映画を用いた聞き取り練習を行わせることにより、英語への関心を高め、また英語の聞き取り能力の向上を少しでも図る。

<対象学生>

藤田保健衛生大学 衛生学部 衛生技術学科 2年（1997年度） 116名

<授業を始める前に>

- ① 映画「フォレスト・ガンプ」(日本語字幕あり・wow wowにて録画)を8分から10分後に区切り、21のパートを作る。
- ② 「フォレスト・ガンプ」のシナリオ(フォレスト・ガンプ 一期一会・角川書店)を用いて、それぞれのパートから比較的聞き取りやすい表現あるいは(多少聞き取りにくくても)覚えておくと便利そうな表現(いずれも1文)を選び出す。
- ③ 選び出した表現それぞれについて、その表現を構成している単語の最初のアルファベット、音声的補助記号等を与えたヒント・シート(資料1参照)を作る。その他、ヒント・シートでは、意味の切れ目で行を変えたり、比較的聞き取りにくい語(機能語・固有名詞 etc.)を与えたり(資料2参照)する。

資料1 (ヒント・シート例)

Y . c . s . () h .
i . y . w . ().

「・」: 音節
() : ほとんど聞こえない子音
— : 音のつながり

資料2 (ヒント・シート例:機能語・固有名詞を表示した場合)

I'm s . () t . g .
o . the N . N . b .
t . Richmon(d) Stree(t).

- ④ 聞き取らせた表現および応用表現(部分的に単語を置きかえたもの、あるいは表現中の一つの熟語等を使いたいいくつかの表現 etc.)の2つを載せた、発音補助記号付き正解シート(資料3参照)を作る。

資料3 (正解シート例)

<その1> (部分的に語句を置き換えたもの)

You can si(t) here if you wan(t).
use this
go home

<その2> (特定の熟語的表現を違う表現で用いているもの)

Mamma's gonna worry abou(t) me.

Don'(t) worry abou(t) me.

Did you worry abou(t) me?

<その3> (同じような状況で用いることのできる他の表現)

What's goin(g) on?

What's the matter?

Wha(t) happen(ed)?

- ⑤ その日のパートの後に、選び出した表現が含まれる箇所(できるだけその表現だけ)を6回録画した編集ビデオ・テープを作る。

<授業の進め方>

- ① パートの視聴: その日のパート(日本語字幕付き)を視聴させる。
- ② 表現の聞き取り
 - (1) ヒント・シートなしで3回: 聞き取ってほしい表現が出てくる状況、またその表現が始まるきっかけ、その表現そのものの意味内容(日本語字幕はずいぶん意識されているものもあるため)等を簡単に説明した後、表現をヒント・シートなしで3回、映画音声を聞かせる。そのとき、聞こえた単語等があればメモさせる。
 - (2) ヒント・シートと共に3・4回: 資料提示装置でヒント・シートを提示しながらさらに2回、映画音声を聞かせる。必要であるなら日本人教員が少しゆっくり発音して聞かせる。さらにもう一度だけ映画音声を聞かせる。
- ③ 解答確認: 資料提示装置で聞き取らせた表現(正解シート上部分)を提示しながら、どのような場合に使う表現なのか、またその内容を日本語で言って聞かせる。その後、日本人教員の後について1・2回発音練習をさせる。
- ④ 応用表現紹介: (聞き取った)表現によって、どのようなものを紹介するかは異なるが2つ応用表現を紹介し、日本人教員の後について1・2回発音させる。

以上、①から④までを5回(1回のパートにつき5つ表現を聞き取らせるため)繰り返す。

<今回の試みに対する反省>（学生へのアンケートをもとに）

① ひとつのパートの長さ及び1回に聞き取る表現の数について

前年度似たような練習を行った際に5分では短いという意見が多かったので、今回は8～10分としてみた。過半数（57%）の学生が「ちょうどいい」と答えているが、3分の1ほど（33%）がまだ「短い」と答えている。映画鑑賞することが目的ではないので、20分・30分と毎回日本語字幕付き映画ばかりを見せるわけにはいかないが、もう少しだけ長めの10分～15分ぐらいにすることは可能であろう。その際、新しいシーンばかりではなく復習も兼ねて前回見たシーンを少し流してみたり、あるいは前回聞き取った表現が繰り返し録画されている部分を流してみるのもひとつの方法かもしれない。

また1回に聞き取る表現の数（今回は5つ）については、過半数の学生（66%）が「ちょうどよい」と答えている。が、「多い」と答えている学生も3分の1弱ほど（27%）いるため、もう少し減らしてもいいかもしれない。

<ひとつのパートの長さ>		<1回に聞き取る表現の数>	
長い	3%	多い	27%
ちょうどよい	57%	ちょうどよい	66%
短い	33%	少ない	2%
分からない	7%	分からない	5%

② ヒントについて

直訳の日本語、単語の最初のアルファベットの表示は「役に立った」と答えている学生がほとんど（それぞれ88%、97%）である。また、単語間の音のつながり及び弱めの音の表示も過半数（53%）の学生が「役に立った」と答えている。

が、単語間の音のつながり及び弱めの音の表示や音節の表示については「分からない」という学生が3分の1ほど（それぞれ27%、32%）いる。そこで、これらの記号をヒントとして与える前に、記号自体の説明をもう少ししっかりする必要があるかもしれない。また、音節については、強勢の置かれる音節の「・」を大きく表示するのも方法だろう。

また、これはヒントではないかもしれないが、教員の発音補助（ヒント・シート提示後、必要に応じて1・2回）に関してほとんどの学生（93%）が「役に立った」としている。が、「それだけに頼ってしまって映画の音声自体を聞こうとしなくなってしまうのは問題」と言っている学生もいるため、発音補助はあくまで補助らしく、あまりにもゆっくりと何回もやりすぎないようにする必要がある。

<直訳の日本語>		<単語の最初のアルファベットの表示>	
役に立った	88%	役に立った	97%
役に立たなかった	3%	役に立たなかった	0%
分からない	9%	分からない	3%
<単語間の音のつながり及び弱めの音の表示>		<音節の表示>	
役に立った	53%	役に立った	9%
役に立たなかった	20%	役に立たなかった	59%
分からない	27%	分からない	32%

③ 正解シートの発音補助記号について

単語間の音のつながり及び弱めに発音される音の表示・音節の表示ともにヒント・シートの時と比べて「役に立った」という学生が増えている（53%→61%、9%→12%）。が、今回もやはり「分からない」という学生が3分の1ほど（27%、39%）いる。やはり、記号自体の説明がもう少し必要であろう。

<単語間の音のつながり及び弱めの音の表示>		<音節の表示>	
役に立った	61%	役に立った	12%
役に立たなかった	12%	役に立たなかった	49%
分からない	27%	分からない	39%

④ 応用表現について

自分では結構時間をかけて用意をしたのだが、「役に立った」という学生が過半数を切ってしまっている（47%）。しかも「分からない」という学生も3分の1を超えている（37%）。もう少し形式や与え方に工夫があるかもしれない。

<応用表現>	
役に立った	47%
役に立たなかった	16%
分からない	37%

⑤ 答え合わせ及び全般について

できるだけ時間をかけて行なったつもりが、やはり少々時間的に無理があったようである。もう少し聞き取る表現数を減らすなどして時間的に余裕を持たせ、さらにできたら学生に答えを聞いてから正解を見せるぐらいのゆとりを持てるのが望ましい。

<学生自身の変化>（学生へのアンケートをもとに）

「英語に耳を傾ける機会や英語の映画を見る機会が実際に増えた」としている学生はそれほど多くない（それぞれ16%、22%）が、「英語の音声に慣れてきた（学生自身の自己判断ではあるが）」という学生、「英語に耳を傾けようという気持ちが強まった」と言っている学生は、ほとんど半数近く（それぞれ41%、48%）いる。また、過半数の学生が「英語の映画が好き」と答えているうえに、今回の練習で4分の1（24%）の学生が興味を示すようになっている。英語の映画が好きになれば見る機会も増え、それはつまり英語を耳にする機会が増えることにつながる。やはり、英語の授業の中で少しでも英語の映画を使用し、学生の関心を引く努力をしてやる必要があると言えるだろう。

<英語に耳を傾ける機会>		<英語の映画を見る機会>	
増えた	16%	増えた	22%
もともとある	29%	もともとある	39%
もともとない	29%	もともとない	25%
減った	1%	減った	1%
分からない	25%	分からない	13%

<英語の音声>

慣れてきた	41%
もともと聞くのは得意	4%
もともと聞くのは苦手	26%
分からない	29%

<英語に耳を傾けようという気持ち>

強まった	48%
もともとある	22%
もともとない	8%
弱まった	2%
分からない	20%

<英語の映画>

好きになった	24%
もともと好き	55%
もともと嫌い	9%
嫌いになった	0%
分からない	12%

<終わりに>

このドリルは単語レベル・文レベルの部分的（全体的な内容把握ではなく）聞き取り練習である。とは言え、聞き取りに使う映画音声は、そのスピードや使われている効果音のため、聞き取るのがたいへん（表現により教員の補助やヒントなどに工夫が必要）な場合もある。そしてそれがもつて、学生の英語を聞き取ろうという意欲を損ねてしまうことも考えられる。

しかし、ナチュラルスピードの英語だからこそ、英語の自然なリズムを理解し真似するための絶好の手本となり得、また「その映画の速い英語を聞き取れたんだ」という喜びも絶大となるわけである。さらに、このドリルを始める前に日本語字幕を通して全体的な内容（その日のパート分ではあるが）を捉えられているため、どのような状況でその（聞き取る）表現が使われるのかも理解しやすい。

確かに今回のこのようなドリルを学生に施したからと言って、確実にかなりの英語能力の向上が望めるとは言い切れない。が、このような形であっても授業の中で英語の映画を使用することにより、学生の英語への関心を少しずつでも高める（前述の<学生自身の変化>参照）ことはできるのである。学生の英語への関心さえ高まれば、学生自ら日常生活の中で溢れている英語に自然に目を向けるようになり、延いては英語力の向上にもつながってくるのではないだろうか。

もちろん、どうせ何か英語の映画を用いた聞き取り練習を行なうのなら、少しでも英語力の向上も期待できるようなものを与えてやれるのが好ましい。そこで、これからはそういう意味での英語の映画を使った教材作りにも励んでいけたらと思う。